

邪馬台国 九州説とムナカタ国

旭学園理事長 高島 忠平



みなさん、こんにちは。邪馬台国から出張を命ぜられてまいりました、高島でございます。その邪馬台国つまり吉野ヶ里遺跡には、皆さんも、既に行かれた方もいらっしゃると思います。ところが私は邪馬台国からはじき出されております。というのは、吉野ヶ里が邪馬台国とは、実は、私は言っていません。候補の一つにはなり得るぐらいしか言っておりませんので、吉野ヶ里に対して忠誠が無いと思われているようです。

吉野ヶ里遺跡というのは、邪馬台国論争に大きなインパクトを与えたことは確かです。吉野ヶ里遺跡で発見された建物や囲いの壕など集落跡遺構のまとまりが「魏志倭人伝」の卑弥呼の都（御家拠）の記述と概略符合するということです。発見当時は、邪馬台国発見と騒がれましたが、こうした発見例として初めての例でしたし、その後巨大環壕集落の全貌は吉野ヶ里以外では明らかになっていません。したがって、唯一の例で邪馬台国と決め付けるのは学問的ではありません。しかし、奈良県纏向遺跡など実際の遺跡で邪馬台国論争が展開できるようになったのは「邪馬台国論争」として進化したのは間違いありません。吉野ヶ里遺跡の発見の意義のひとつであります。このことと並んで大事なことは、吉野ヶ里遺跡の全貌が明らかになることによって、日本の国、日本の国家の起源となるムラからクニへとといった「国」の成立の過程、あるいは発展の過程を吉野ヶ里遺跡 700 年の歴史がそれを段階的に示してくれる、そういう貴重な遺跡です。日本列島における国家の起源の一端を明らかにできるのです。

といいながら、私は論争の一方の邪馬台国九州説をかたくなにしています。とある邪馬台国に関するシンポジウムで、絶対唯一の王権が列島を統一するといった中央史観ではなくて、地域王権の競合の過程で統一政権が生成するといった地域国家の立場から、「邪馬台国は近畿にさえなければいい」と発言したところ、かつての上司、弥生時代研究の第一人者であった故佐原真さんから「君はアンチ巨人ファンか」と言われました。「はい、そうだ」と。「やはりそうだな。奈良の国立文化財研究所にいた時に、君の九州説はこてんぱんに、みんなからやられたからな。その時の怨念が、君の九州説のエネルギーになっているんだ」と、こう言われました。なるほどそうかもしれないですね。基本的に、僕は定説に抵抗する、あるいは反抗するというのが、私の研究姿勢であります。

余計なことを話していると、また時間がなくなりますので、今日はお手元に資料を渡しておりますけれども、論点を5つくらいに絞ってお話をしたいと思います。

第1点「弥生時代の国とは」

その倭人の国の政治的成長の過程というものを第1点として話をいたします。第2点は、「ムナカタの国の生成」、どのようにしてムナカタの国ができていったか、ということです。それから、3番目に「ムナカタの文化の広がり」です。それに関連しますが、4点目として「ムナカタの国の特色」です。先ほどの3番目の広がりとは、系統と言ったほうがいいかもしれません。どういう所と文化的によく繋がっているかということです。それから、5番

目に「邪馬台国はやはり九州」ということで、締めとさせていただきたいと思っています。

それでは、第一点弥生時代の国とはどういうものかです。ここに吉野ヶ里の復元写真を出しております。これはどう考えても邪馬台国？ですね。そのアンチテーゼとして、奈良県の纏向遺跡の遺跡が発掘されて、いろいろな想像復元図が出てきております。それでも、やはりこれまでのものは想像できません。ほぼ全域を発掘できた吉野ヶ里だから復元できたというものであります。

吉野ヶ里遺跡は邪馬台国ではないにしても、一つの国の首都のようなものであります。そういうものを首都とした国がどういうものかということ、一つ模式図でお示したいと思います。

当時の「国」のイメージ図です。中心に吉野ヶ里の遺跡があります。周りに衛星的な集落が、さらにその周りにまた点々と集落があります。吉野ヶ里遺跡の環壕集落は日本最大で40ヘクタール以上あると言われています。吉野ヶ里遺跡というのは、脊振三麓から派生する長細い丘陵があります。東西600m、南北5km程の約300ヘクタール丘陵地帯に、環壕集落と同じ時期の遺跡が広く群在しています。その遺跡群を吉野ヶ里遺跡と通称しています。その南の端の所に環壕を設けた約40ヘクタールの環壕集落があるわけです。吉野ヶ里丘陵一帯の遺跡は結びつき、大きな社会集団の存在を窺わせます。

これが氏族社会を形成していると考えています。その中の一部に、40ヘクタールを超える吉野ヶ里の環壕集落があり、上位の階層の居住・拠点となっています。それを中心に、周りの丘陵や平地・海岸部に環濠を持った別の氏族集団があり、そして、その周りに配下の親族的集団が存在、これが環濠を持っていない小規模な集落であります。こういうものを中心に吉野ヶ里遺跡、いわば吉野ヶ里の環濠集落を中心とした地域があります。そして、それぞれの衛星集落というのは、港の役割を果たす所とか、あるいは漁村的な位置にあるものとか、あるいは平地にあるものとか、あるいは丘陵地にあるものとか、あるいは山麓部にあるものとか、あるいは山村的なものとか、いろいろな立地によって生業・機能を持った集落群で、それらをまとめたのが吉野ヶ里遺跡の集団であります。この広がり、弥生時代後期の遺跡を参考に模式図を作ってみましたわけですが、周り、隣の地域の遺跡のあり方、遺跡の分布のあり方からすると、現在の郡くらいの広がりです。それが、弥生時代の国として捉えていいと見ております。

それから「邪馬台国の構造と吉野ヶ里」です。吉野ヶ里を邪馬台国と考えているわけではありませんが、倭国と邪馬台国というものを図式にするとこうなります。邪馬台国を中心に、周りに奴国、伊都国、末盧、菟岐とか、あるいは不弥国など約三十国、その外側に女王国と争う狗奴国があります。そういうことで見ていくと、吉野ヶ里の国の存在位置は倭国と邪馬台国の関係とよく似ているということでもあります。

吉野ヶ里遺跡の発掘調査の主任で、この模式図を作成した七田忠昭さんは吉野ヶ里が邪馬台国だと考えています。吉野ヶ里遺跡が発見されたころは、近畿説をとっていました。吉野ヶ里遺跡が出てきて豹変されております。発掘現場のメンバーは7人でしたがその中に私が加わると、1対7で近畿説のほうが多かったのですが、いまやほとんどの人が九州説に変貌いや豹変しております。

しかし、今日のシンポジウムのパネラーでも、恐らく3対1くらいかなと思います。邪馬台国九州説は少数派であります。私の尊敬する奈良大学の元学長だった水野正好さんは、私に向かって、「君は、邪馬台国九州説絶滅危

惧種だ」とまで言われます。僕は、有り難くその言葉を頂いております。「いまや、邪馬台国九州説は徐々に増殖しつつある。いずれ大勢を占めていくことになる」と抗っています。

「魏志倭人伝」に記す倭人とか倭種とか、倭人の社会の記述が出てきましたけれども、倭人というのは列島のどの地域に住んでいたのかなということです。参考になる図面があります。この地図は日本列島における弥生時代環濠集落の分布図です。点ひとつひとつが、正確の数を表しているのではなくて、環濠集落分布の概観であります。全国では環濠集落が500以上発見されています。ただ、発見されるのは、現在の北海道と東北、そして沖縄を除く地域であります。この地域というのは、私は倭種・倭人の棲息地域と見ております。と同時に日本の古代国家、7世紀の終わり頃に確立した天皇を権力の頂点に置いた初期の律令国家の版図でもあります。

この地域は別の角度からみると、考古学者の柳田康雄さんが指摘されていることですが、青銅器、銅の腕輪であるとか、巴形銅器ヒトデのような格好をした青銅の飾り金具があります。その弥生時代特有の分布範囲と、ほぼ一致するわけです。青銅器というのは、弥生の文化の特色の1つでもあります。そういうところから見ても環濠集落の分布範囲というのは、弥生時代文化を共有する何か意味を持っている。特に環濠集落というのは戦いの装置であります。こういうものがこの地域に分布しているということは、何かこの中に、全体としてうごめくもの、つまり倭人・倭種の政治的・社会的動向が共通して在るのではないかと考えます。

それで、私はこの地域に数百の国があると考えています。数百という言い方しかできませんが、初期の律令国家の時代には400~500くらいの郡がありました。それで、郡と国が対比できると私は言っていますので、では、500くらいの国があるかという単純にそうは言えないというふうに思います。恐らく国を確立し、さらに国が連合している地域、あるいはまた国へ向かって突き進んでいる地域、あるいはまた国への胎動を示す地域、いろいろあるのではないかとこのように思います。そういう観点からしていくと、3世紀には数百くらいの国は成立しているであろうと見ております。

それで見ていくと、九州に約50幾つかの国があるということが見てとれます。これは九州大学の岡崎敬先生が、弥生時代の一つの有力な遺跡を中心とした一定のまとまりがあると、後世の郡くらいの範囲であると。それは、古墳時代になっても前方後円墳を造営する地域単位でもある。さらに、奈良時代の郡の豪族である長官が氏寺を造営する地域である。それを見ていくと、歴史の長い間に、そこに統治された政治的な社会が継続してあったかということを見てとれる。それが、弥生時代であれば弥生時代の国である。そういうものを追いつめていけば、邪馬台国はその延長線上に浮かんでくるという考え方を示しておられました。岡崎説に基づいて作成したのが九州の「国々」図です。

この九州北部半部を見ていきますと、約40の国が考えられます。女王卑弥呼が統括した30国というのは、なにも近畿地方のお世話にならなくても九州だけで充分賄えるわけであります。こうした国がどのように成長を遂げていくかというのは、実は中国の歴史を見ていけば歴然であります。

最初に「国」が出てくるのは『前漢書』『地理志』ですね。朝鮮半島にある中国の植民地「楽浪郡の東南の海の彼方に倭人がいて分かれて百余国あると。中には朝見してくる者がいる」ということが書かれています。これをみてもどうも中国は、倭という地域にある国のまとまりを、倭人と捉えているようです。一つの国を、倭としては捉えていないということです。

次に、『後漢書』。光武帝紀、建武中元二年（西暦57年）に、「東夷倭奴国王遣使奉献」、同東夷列伝に「建武中元二年倭奴国奉貢朝賀・・・光武賜以印綬」されたとされる記述があります。印綬は現福岡市の志賀島から出土した「漢倭奴国王」と刻まれた金印をさすといわれています。通説では「漢倭奴国王」は「魏志倭人伝」に出てくる奴国の王であるといわれています。倭は文字通り委で奴は都で伊都国王ではないかという見方がありますが、私はどちらとも違う見方です。

当時、中国は倭人社会の一つの国を捉えることはありません。常に、倭人の国々の集団を捉えます。ですから、あの時期は、恐らく北部九州沿岸部と思います。このムナカタの国も入っていると思いますが、対外交渉という重要な当時の政治経済上の中国との関係を、恐らく沿岸部の国々が連携・連合をして使者を送ったと考えられます。それで、倭奴の国王だということで金印を賜ったわけです。倭奴は騎馬民族匈奴を匈奴と呼ぶ蔑称説を私はとりません。中国の古い漢籍の大家であった福永光司さんの「当時の中国からすると倭人を倭奴としたのは匈奴と同じ蔑称である」ということです。私は、中国が倭人、倭種を国々の集まりとみているところから、倭奴というのは一つの国を表していないからです。後漢書には倭奴の前の記述に匈奴とあります。一連の夷に対する呼称です。

志賀島の金印は、当時の一定の国々のまとまりのまとめ役である倭王に贈った印鑑であって、奴国王とも限らない、伊都国王とも限らない、ひょっとしたらカスヤか、ムナカタ王だったかもしれないですね。志賀島は現在は福岡市ですが、あそこは旧糟屋郡（カスヤの国一不彌国？）に属しています。志賀島は神なる島で沿岸諸国の共通の海神の祭りの場であったと思います。そうした場所に奉献埋置したのです。いずれにしても、沿岸諸国が共通の利害、特に対外交渉（朝貢交易）を宗主国中国とおこなうために連合するようになっていることを後漢書の記述は物語っています。この時期「国」の拠点になる（環壕）集落が吉野ヶ里の例が示すように「国」公設の市などが整備されます。

2世紀の初め、安帝永初元年に倭国王帥升等が160人くらいの生口を献じて奉見を請います。皇帝に謁見できたか不明ですが、160の大人数を中国に献じます。これだけの大人数を送るといことは、卑弥呼も後の壱与もしていません。倭国王帥升等とありますので、これは倭国の連合の国々が、帥升を倭王として中国に使者を送るために、国々が供出し、朝貢交易の見返りに預かろうとしたのではないのでしょうか。だとすると160人という数字もうなずけるわけです。この時も、中国は国々のまとまりとして捉えているわけですが、倭人の国々の連合は半世紀前より政権としては拡大・発展しているのではないのでしょうか。

「魏志倭人伝」の段階、3世紀になっていきますと、少しその国々の連合も、先ほど市川さんがお話になったように、全体を統括する一大率とか、あるいは各国に共通する卑奴母離とかがみられます。女王国政権は、2世紀段階よりは一段と整備されています。各国には官・副官と未分化な階層、大人による階級的支配体制、卑奴母離といった軍政官は沿岸部の国々に配置、女王国より北には朝貢交易を勝手にさせないように監察官である一大卒を伊都国に配置、伊都国の津（港市）における中国・韓諸国との朝貢交易の統制・独占など女王国は国々30国をまとめていく上での新たな政治制度の整備を見てとることができます。各地の倭人社会も、かなり政治的な進化を遂げているということが言えます。

そうした連合の頂点に立っているのが、卑弥呼であるということが言えると思います。ですから、何気なく中国の文献を読んでもとわかりませんが、紀元前1世紀から紀元後1世紀、あるいは2～3世紀という段階の中

国の歴史文献を追っていくと、日本の国が生まれてそれが連合して、その連合の政治体制が整っていく有様がよく読み取ることができるわけです。そういう中に、北部九州の考古学的な成果を対応させていくと、よくまたそのことが理解できるようになるわけです。

第2点「ムナカタの国の生成」

現在の宗像地域に弥生時代に「ムナカタの国」が生成していたかということをも弥生時代の遺跡の内容、分布状況から見ていきます。まず、この地域には縄文の晩期から弥生時代の初期にわたるお墓があって、朝鮮半島系の石製の武器を副葬したり、それが木棺墓であったりします。それからすると、縄文時代晩期（弥生時代早期という人もいる）、農耕社会が列島に成立した段階から、この「ムナカタ」という地域は、文化的に特色を持ち、北部九州弥生社会では一定の地位を占めていたといえます。結論からいうと一つの「国」を形成する対外交渉の海人集団の拠点として大きな地位を占めていたと思います。

これまでの調査研究の成果から見ると、釣川中流域、それから上流で釣川の南部域、それから福津市の西郷川流域、もっと広げて、鞍手地域まで広げてもいいと思うのですが、弥生時代の遺跡のグループ分布があります。いずれも弥生時代の始まりから、弥生時代後期までの遺跡の展開を見ていくことができます。こうした各グループは祖先・血統を同じくする氏族だと考えます。そういった4つか5つの地域の氏族集団が政治的に一つにまとまって、ムナカタの国をつくったと見ております。その段階は、弥生時代中期前半の田熊石畑遺跡の時期だろうというふうに見ております。この時期に特定の区画墓、墳丘墓の可能性も考えられていますが、吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓のような特定の区画（墳丘墓）に青銅器を副葬した首長層のお墓が集まる。こういう現象は、北部九州の他の地域に幾つかの例を求めることができます。福岡市の吉武高木遺跡群、佐賀県鳥栖市の柚比本村遺跡であるとか、少し後れて福岡県の小郡市の隈・西小田遺跡、福岡市樋渡遺跡、同須玖岡本遺跡、糸島市三雲南小路遺跡など首長層のお墓が集まる墓域があります。そういう墓域が出てくると同時に、一般成員の墳墓造営に対して、強制的ともいえる一定の規制が働いてくる。一般に列埋葬といわれるこの時期に見られる墓制です。これは列状に縦長く、各墳墓が営まれている状況です。あらかじめ各村々の人たちのお墓の位置が決められているわけです。そこにお墓を作ることがなれば強制されている。

吉野ヶ里や吉武高木遺跡の例からみると、長さ数百m、長さ600mにもなる例があります。弥生時代中期前半に集中します。そして、そのお墓の中からは、戦いで傷ついたり、あるいは亡くなったりと思われるような証拠が、北部九州で100例近くあると思います。弥生時代中期前半、紀元前2世紀の終わりから紀元前1世紀の初めにかけて、各地で国が生まれるにあたって、その国の生成をめぐる主導権の争いがあったのではないかと思います。墳墓造営の格差、一般成員への墓造営の強制、そして戦いは、この時期北部九州各地において「国」が生成過程にあったことを示していると考えています。

ムナカタの遺跡、田熊石畑遺跡も同様な傾向が見てとれると思います。この地域集団が中心になってこの「国」づくりをしたのではないか、各地の集団を政治的にまとめる形で国づくりがなされたと考えております。

第3点目「ムナカタの文化の広がり」と系統」

先ほどもお二人がお話しされました、なるほどという点もありますが、私は意見が違います。例えば、中細形銅剣というのが紹介されましたね。刃先が細く鋭い細形銅剣と違って、切っ先も元のほうも少し幅広いものです。これは吉野ヶ里遺跡の同じ時期の甕棺から出てまいります。それから、佐賀県鳥栖市の柚比本村遺跡から出てまいります。その鑄型が佐賀平野の各地から出てまいります。そういう目で見ると、私はむしろ、遠賀川をさかのぼるような形で、佐賀平野、あるいは筑紫平野と、中細銅剣出現のいち早い青銅器文化で結び付いているのではないかと見ております。

そして、飯塚市の立岩遺跡で作られ、北部九州一円に頒布された石庖丁という穂摘み具があります。これは、宗像南方の笠置山で採れる輝緑凝灰岩という特殊な石で作ってあります。これが宗像地域でも出土します。ただ、ほかの地域ほどたくさん出てきません。ほかの地域の4分の1くらいの数で、また増えてくるかなとも思っていますけれども、その点から見ると、どうもあまり石庖丁という、農耕に使うような道具の需要よりもムナカタの人たちは交易とか、漁撈のほうが主たるなりわいではなかったかと。やはり海人族ではなかったかと、海洋民ではなかったかというふうに思います。

また、先ほど銅戈が特色だと言われましたけれども、これはやはり遠賀川の中・上流との結びつきが説明されたようにあります。特に立岩遺跡では、鑄型も出てきております。遠賀川の水源地に近い所まで行くと鎌田原という遺跡で、やはり銅戈が出てきている。背後の南の山を越えれば、立岩の石庖丁がたくさん出てくる朝倉・甘木地域でもあります。佐賀平野の吉野ヶ里や周辺からもたくさん出てまいります。そういう石庖丁を媒介にしてのつながりが考えられます。宗像は遠賀川中・上流地域の「国々」にとって対外交渉・交流の先端的役割を担ったのではないのでしょうか。

それから、遠賀川流域の独特の土器の形があります。甕の口縁の端が上のほうにちょっと跳ね上がる、跳ね上がり口縁と言っています。こういう土器文化がこの宗像でも、弥生時代中期の土器の様相として見てとれる。これは、遠賀川流域、中流域の立岩遺跡でもよく見られますし、その一部が吉野ヶ里遺跡の近くの三津永田遺跡からも出てきております。私は吉野ヶ里周辺の佐賀平野と、それからムナカタの地域が遠賀川を通じてのつながりというのをより強調したいと思います。

銅矛においてもそうです。刃先の短い銅矛がありますけれども、あの鑄型は佐賀平野で各所に出てまいります。ですから、佐賀平野で作ったかどうかは別として、短い銅矛を使う、ひとつの武器文化というものは、やはり共通したものを持っている。ああいう武器がどうして用いられるようになるかというのは、戦いの武器としても使いますが、剣など武器というのは、政治的支配を示す象徴的なものであります。この草薙剣とか、神話の中でもその性格が言われているように、やはり、ああいうものを所持するというのはその地域の社会の指導者であり、首長であり、支配者であると。つまり政治的支配者の表象として終生所持されたことを示しております。

そういうものが、田熊石畑遺跡から出てきているというのはそのことだと思いますし、また、各地の氏族集団をまとめていく人たちもそういうものを持っていた可能性があると思います。釣川上流も南部もあちこち、それから福津市の西郷川流域でも青銅器が出てくる。一つのまとまりがあるのは確かですが、それらを大きくまとめたのが、私は田熊石畑遺跡の被葬者ではないかと思っています。そして、それはむしろ、遠賀川を通じて、内陸と結び付いているということでもあります。

現に、立岩遺跡は甕棺が結構多く発見されましたけれども、筑紫平野・福岡平野ほどではありません。もともとの墓制は木棺であります。そういう意味でいうと、福岡平野も、最初は木棺であります。春日市の伯玄社遺跡です。いつのころからか甕棺になるのです。

木棺というのは見ていくと、どうも朝鮮半島の東半分の文化のようです。西半分は支石墓の墓制文化のようがあります。朝鮮半島は、大きく分けて二系統の文化があって、それが日本、特に北部九州に渡ってきているということが言えます。それは、初期の木棺墓の地域と、初期の支石墓の地域を見分けていくと、はっきりいたします。

そういうことで、ムナカタ国の特色としては、一貫してお墓が木棺、そして、変わるにしても石棺であります。成人の甕棺墓を受け入れなかった、そういう特色を持っております。宗像地域の弥生社会は、中細の銅剣を北部九州の中でもいち早く用いるようになった。中細形銅剣は中広形、広形への変化、祭器化への端緒である。銅剣が祭器化する。その地域の首長の政治的威信器として終生保持されると共に、戦の神を祭る軍事的祭祀の発展が背景にあると思います。そうした動きが「ムナカタの国」の先進性を表していると思います。

最後に邪馬台国は、やはり九州ということですが、何も卑弥呼が統括した30国に、このムナカタの国はこだわらなくてもいいと思います。『魏志倭人伝』は、倭人の社会を3つのグループに分けて捉えています。

1つは、卑弥呼が統括する30の国です。対馬、壱岐、末盧、伊都、奴、不弥、投馬、邪馬台国など含めた30国ですね。志摩国も入っていますかね、30国。それとは別に、この女王国と、元から仲の悪い狗奴国の連合がいます。狗奴国というのは男の王でありまして、単独の国として戦っているのではなくて、狗奴国連合というのをつくっているようであります。その地域はどこかというのがありますけれども、私は熊本県の南部以南であろうと見ております。この地域は、非常に特殊な土器の文化圏であります。そして、環濠集落をつくるのもありますけれども、山岳地帯に村をつかって、狩り・焼畑を一つの大きな生業としている人たちが、山地中に、あちこちにいることが遺跡の分布から見てとれます。阿蘇のカルデラ内の平野には、弥生時代後期に鉄製品をたくさん持った環濠集落が多くあります。この地域の土器はどちらかというと、南九州との関係が深い土器です。

そういうことで考えると、30国と対立する狗奴国の連合という2つ目のグループがあり、それからもう1つ、女王国から東、海を渡ること、千余里の所に国があって、これも倭種である。倭人であるということを記しています。列島に生息する倭種・倭人は少なくとも3つのグループに分けて捉えられているわけです。ですから、女王卑弥呼の政権は、倭人社会では限定的なものであるということであり、3世紀の段階に日本列島の大部分を統一したような政権は存在しないというのが、私の考えであります。

そうすると、先ほど申し上げたように、女王卑弥呼の統括する30国は、北部九州で十分であると。何も近畿地方のお世話にならなくてもいいと。また、30国に収まらない国々もたくさんあるということでもあります。その1つがムナカタの国であってもいいし、その特色から見ても、そういう地域とは文化を違えた、あるいはアイデンティティを違えた、一つのムナカタの国というものを考えてみたらどうかと考えております。

以上でございます。どうも、ご清聴ありがとうございました。